

《特定の人との関わりを通じた学習》

今回のワークでは、冒頭の「ワークを始める前に」というページで、これから読んでもらう文章の作者(三好)を紹介しています。また、10の各話の最初の問題0:「はじめに」は、それぞれのお話を読み進めていくにあたっての[前説]ですが、その自由回答の問いでは、作者から、読み手に対して、“あなたは”と呼びかけ、読み手の個人的な経験や好みなどについて尋ねています。

これらのように、今回の「おはなし読解ワーク:説明文集」は、作者の存在を明示し、読み手に対して語りかける、という形式をとっています。教室で先生が、生徒にお話をするようなつもりで、ワークの文章を作りました。また作者に関する個人的事柄も、文章の中にできるだけ織り込むようにしました。そのような作り方をしたのは、このワークを、「特定の人との関わり」を通じた学習教材(もしくは読み物)としたかったからです。

最近、指導者としての私と、学び手である子どもとの間の[個人的繋がり]を背景とした学習、に重きを置くようになってきました。

直接、子どもと対面できる、ことばのテーブルでの指導では、私自身の体験を学習の題材としたり、また、自分と子どもとで、それぞれの個人的な事柄について、交互にインタビューをしあう、というような課題も行っています。

なぜそのような学習を採り入れるようになったかということ、互いに相手をよく知っている間柄で交わされるやりとりのほうが、学習者の関心を引きやすく、また、相手に対する豊富な知識(情報)が、語りや学習課題での推測を引き出しやすい、と感じるようになったからです。学びの動力となる、[関心⇄知識⇄推測]の循環を形成するのに、有効な方法だと思えます。

とくに発達に未熟さがある子どもにとっては、このような特定の人との関わりが、学習を進める大きな援助になると考えています。

そういえば先生は
旅行が好きだったな



もちろん知識や能力は、どんな学習環境においても、どんな先生との関わりにおいても、習得できることが理想です。しかし人間には、「領域固有性」と呼ばれる、慣れ親しんだ状況の方が頭が働きやすい、という特性があります。特定の人との関わりも、慣れ親しんだ状況の一つです。まずは、その中で力を出せるようになることが、より内発的で洞察に富んだ学びへの橋渡しになるのではないのでしょうか。

今回のワークは、面識のない不特定多数の教材ユーザーとの関わりを、少しでも指導室での自分と子どもとの関係に近いものにしたい、という意図のもとに作成しました。

文章を通し語りかけてくる、「作者個人」への関心や情報が、先を読んでみたい、という意欲に繋がり、また読解の支えになってくれれば、と考えています。

☆関連資料として、葛西ことばのテーブルHP内の学習会資料(第19回「教材について考えるI」、および、第10回「読解問題について考える」)を、ご参照いただければと思います。